慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 藤原先生の追憶 |
| Sub Title | |
| Author | 内山, 正熊(Uchiyama, Masakuma) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1978 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.3 (1978. 3) ,p.128- 130 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 藤原守胤先生追悼記事 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19780315-0128 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 藤原先生の追憶

内山正熊

憶えば、藤原先生が塾の専任教授になられて以来、実に三十年近くも私は先生に接していたことになる。この意味では、先生と最も深い師弟関係にある賀川、太田の両教授より、少くともより長い時間的接触をもつていたことになる。しかし、本当のことをいつて、先生の追憶文を書くのに私は適格であるとは思わない。なぜならば、先生の交友関係は、広汎にわたり、私よりもつと密度の濃い関係をもつた方が沢山あることを知つているからである。それにも拘らず、私がこの文を書かなければならないのには、二つの理由がある。

その一つは、昨春、中村菊男教授がはからずも長逝されて以来、そのため私は現役の塾法学部専任スタフの中では、最先任ということになつてしまつたからである。いま一つの理由は、僅か二年足らずではあつたが、法研委員長としての先生にお仕えしたという経験をもつているからである。

先生とは専門もちがい、特に個人的な親密関係をもつていたわけでもなかつたが、旧制教授会で顔を合わせる先輩教授の中では、なぜか一番親しみを感じていた。今から二十年も前の教授といえば、人数も少く潮田先生をはじめ近づき難い威厳をもつて居られた。その先輩教授の中で、藤原先生にはそうしたこわさが感ぜられないで、いつもらくな気持で接することが出来た。全く古きよき時代の大学教授の典型のような方で、いかにも慶應の学者らしいゆとりのある先生であつた。それを身近かに感じたのは、塾内でよりも、政治学会においてであつた。政治学会は、春秋大会の中一回は地方で行われるのがつねであるが、大阪や京都であると、先生は必ずわれわれ塾からの参加者をひきつれておごつて下さつた、固い話をなされずソフトな雰囲気で。理事会では、私は末席に控えた監事として、先生の理事ぶりを拝見していたのであるが、恰幅のいい先生は、他の大学のどの理事より貫禄があり、いつも朗々と自説を述べられるので心強く感じたものであつた。

しかし何といつても、法学研究会を通じての先生との関係が、私にとつては最も印象的で忘れ難い。それは、主に仕事の上でのことであつたが、編集担当などということにはおよそ不向きな私がやつていることに、先生はさぞかし御不満であつたろうと思われるのに、昭和四十二年から四十三年にかけて二年近く、一言も文句をいわれたことがなかつたからである。実を

いうと、私の前任者は有能敏腕、事務能力では抜群の定評があつた手塚先生であつたから、反比例的に、もたついた私のやり口には、いらいらされたにちがいない。しかし、それにも拘らず、先生は全く一度も私に意見がましいことはいわれなかつた。何事も私の思う通りにやらせて下さつた。ちようどその頃は、学園紛争に際会していて、法研のことよりもその方にスタフは心を奪われていて、原稿の集りも必ずしもよくなかつた。それでも、とにかく、一号も欠けることなく法研を月々出すことが出来たのは、先生の御人徳、御力添えによることが多かつたと思う。先生は、率先して巻頭論文をお書きになつて、私を援けて下さつた。またある編集委員会で、先生の論文が長すぎるということが問題になつたことがあつた。委員長の書くものにくちばしをいれたりしたら、普通ならば、頭ごなしに怒られてもいいところであるのに、先生は黙つて委員会の意見をお容れになつた。これには実に驚いてしまつた。私など圭角の多い人間は、もう書かないと憤慨するところだが、先生はその御不満をわれわれにぶつけることをなさらなかつた。私は実に感心してしまつた。先生は文字通りの大人であられた。人の頭に立つ者は、こういう風格をもたねばならないと感じた次第であつた。

法研に関することではないが、いま一つ先生のお人柄に心打たれたことがある。それは、先生の弟子に対する情愛の深さをまのあたりに見たからである。もう大分前のことであるけれども、先生指導下の政治思想史専攻の学生が助手を志願したときのことであつた。助手になるのは、今でも頗るむずかしいが、その時分でもやはりその採否について議論がやかましかつた。先生の下で研究にいそしんでいた某君は、助手試験を受けて不幸にも失敗してしまつた。しかし、その学究への志もだし難く、再びまた彼は翌年助手を志願したのである。教授会の空気は、一事不再理の建前から、採用を非とする大勢になつたとき、先生は、本人が勉学熱心で、年々力をつけて進歩していることを力説され、仮に前年出来がよくなくても、今年ずつとよくなつている。努力している者が二度でも三度でも受けてもよいではないかと、力をこめて熱心に彼を推されたのである。結局その学生は、塾に残れなかつたけれども、他の大学へ行つて、今では立派な助教授として活躍している。このときの先生に私は感動した。先生は、本当に心の温い方であつた。

先生のお宅に伺つたことは、あまり多くない。ただ今でも思い出すのは、法研の仕事でどうしても先生に御連絡しなければならないことがあつて、軽井沢の御別荘に伺つたことがあつた。先生は、私と太田君とを心からねぎらつて下さつた。そのとき御家庭で先生がくつろいで屈托なくお話し下さつたこと、

帰りには中軽井沢の駅までわざわざ見送りに来て下さつた着物姿の先生のことなど未だ忘れられない思い出である。最後にお見かけしたのは、中村教授の御葬式で、先生は静かに冥目していらした。いまは、先生が天国で安らかに息んでいらつしやることを信じて疑わない。心豊かな善意の先生であつた。

（一九七八・一・三）